

癌検出する。気管支鏡にて右S₃入口部にポリープ状隆起および左上下幹分岐部より上区まで広がる浮腫状の病変がみられた。両側ともに生検所見は扁平上皮癌であるが進展様式の相違より同時期発生両側重複癌と考えられた。左肺に関してはLt-upper sleeve lobectomyを施行し、右肺に対しては、患者の再度の手術に対する拒否のため、放射線療法施行中である。

13. 同時性肺多発癌の1治験例 愛知県がんセンター病院外科第2部

陶山元一 国島和夫, 高木 巖, 大西洋平 藤野昇三, 古田和雄, 田中雄二 同 内科第2部

西村 穰, 浦田淳夫 同 臨床検査部 佐藤秩子
症例は55才男, 地方公務員, 昭和57年春の検診で左下肺野の異常陰影を指摘され, 某医院通院, 経過観察していたが, 咳, 痰が続き時々発熱するため, 当院へ検査を依頼された。気管支鏡で左B^{4,5}のほかに, 右B⁶にも腫瘤を認め, 生検とともに扁平上皮癌と診断された。右B⁶に対し放射線治療を, 左B^{4,5}に対し, 左上葉切除術を行った。切除標本で気管支壁内にとどまる肺門部早期癌と診断され, 同時性肺多発癌と診断した。

14. 10年の間隔をもって発生した多発肺癌と思われる肺癌例について

国立名古屋病院呼吸器科
宮地卓也, 小倉幸夫

左肺門部の intermediate cell type の small cell carcinoma が完全寛解したと思われる患者に, 10年後, 対側の右上葉に squamous cell carcinoma が発生し, 多発肺癌と考えられる一症例を経験したので, その経過と両組

織像などを紹介し, 文献的考察を加えて報告する。文献的には, 第一癌が small cell carcinoma で, 第二癌が squamous cell carcinoma の多発肺癌は, 剖検例中の肺癌と肺癌の多発癌のうちでは比較的多い。

15. 当科における肺癌症例の検討

名古屋市立東市民病院第4内科
山本素子, 林 嘉光, 花木英和
昭和50年以降の8年間に経験した原発性肺癌121例について検討した。男女比は2.8:1, 組織型は扁平44%, 腺25%, 大13%, 小13%, 平均年齢は66.4歳, III・IV期の症例が約70%であった。手術例に比較して非切除例の予後は不良で, 5生率1.9%, 3生率3.7%, 1生率17.8%であった。生存曲線を性別, 組織型, 病期, PS, 検査所見で分けて検討すると, PS, LDH, Alb値のよい群が有意に予後良好。内科的治療で3例が4年以上生存した。

16. 当施設における原発性肺癌の非手術長期生存例の検討 島田市民病院呼吸器科

カレッド・レシャード
乾 健二, 岡野昌彦, 神頭 徹
原発性肺癌手術不能例に対し, 年令, 病期や Performans status を考慮した化学療法や放射線療法を施行したところ21ヶ月~41ヶ月の長期生存例を得たので報告した。なお, 自験例の2年生存率は9.7%, 3年生存率は6.7%で, すべて腺癌であった。

17. 肺小細胞癌に対するCOAM療法とCOAM-VAP療法の治療成績

愛知県がんセンター病院内科第2部
浦田淳夫
杉浦孝彦, 西村 穰, 太田和雄
肺小細胞癌に対するCOAM療法 (CTX, VCR, ACNU, MTX)

とCOAM-VAP療法 (CTX, VCR, ACNU, MTX-VP16, ADR, PCZ) の治療成績を検討した。COAM療法を16例 (Limited Disease 3, Extensive Disease 13) に行い, 有効率63% (CR13%, PR50%), 中間生存期間はLDで10か月, EDで4か月であった。COAM-VAP療法はまだ症例が少ないが6例 (LD 1, ED 5) に行い有効率67% (CR67%), 5例生存中である (生存期間3か月~12か月)。COAM-VAP療法はCR例が多く得られ, 長期生存の期待できる治療法と考えられる。また特に問題とすべき副作用はみられなかった。

18. α -Fetoprotein が高値を示した肺腫瘍の1例 県立愛知病院内科

高木英志, 前田富実雄
竹浦茂樹, 永田 彰, 高島常二
名古屋大学第一内科 下方 薫
名古屋大学第一病理 橋詰良夫
今回我々は α -Fetoprotein が高値を示した肺腫瘍を経験したので報告する。症例は67歳男性。昭和56年5月胸部不快にて近医受診。胸部X線にて右肺上葉に鷲卵大の腫瘤影あり。当院精査入院となる。経皮肺生検にて大細胞性未分化癌と診断。同時に α -Fetoprotein が10000 ng/ml と高値。肝CT異常なし。放射線と化学療法にて一担軽快するも全経過約1年で死亡。剖検時, 肝, 腎に転移を認めた。

19. 原発性肺癌マーカーとしての血中 Tissue polypeptide antigen (TPA) 値の臨床的検討

浜松医科大学第二内科
千田金吾, 谷口正実, 早川啓史
本田和徳, 今井弘行, 佐藤篤彦
原発性肺癌61例において Tissue Polypeptide Antigen を測定

九州支部

し、markerとしての意義を検討した。血中 TPA 値の平均値は222.4U/l, 陽性率62.3% (Cut off 110 U/l) であった。各組織型での平均値, 陽性率はSq (23例):227.5 U/l, 60.9%, Ad(24):220.9, 62.5, Sm(10):241.2, 70.0で広いスペクトルを示した。Stageの上昇によりTPAの陽性率は上昇し、10例のope前後のTPA値の検討で6例に低下をみた。また炎症性疾患での陽性率はferritinに比して低く、以上より臨床的に有用な marker であると推定された。

20. 癌性胸水の生化学的パラメーターによる補助診断の試み

名古屋市立大学第2内科

吉川公章, 森下宗彦, 杉浦孝彦
高田勝利, 鳥井義夫
市村貴美子, 橋上 裕
鈴木雅之, 山本正彦

大同病院

伊奈康孝, 野村靖郎

中京病院

村松元江, 西脇敬祐, 岩倉 盈
愛知県がんセンター病院

蒲田淳夫

城北病院

荒川啓基

癌性胸水の補助診断の目的で、CEA, ADA, IAP, TPA の測定を行った。対象は診断確定した53例の胸水で、CEA, ADA, IAP 各々で癌性と結核性に有意差があった。カット オフ レベルを設定して各項目の癌性の陽性点数を求めると癌性は3点以上が94%、3項目以上陽性のもののうち癌性である特異性は94%であった。新に6症例の胸水を本基準で解析した所、癌性3例良性2例は他検査で一致、乳癌胸の1例は全陽性をしめしたが確診されておらず、これを除くと100%の診断率であった。

印象記

第42回中部肺癌学会は6月4日(土)名古屋市立大学病院大ホールで開催された。同じ大学のキャンパス内で、第61回日本結核病学会東海地方学会および第43回日本胸部疾患学会東海地方学会が同時期に開催されていたこともあり、参加者は250名を数え、盛会であった。

招請講演は、香川医大・外科・前田昌純教授の「気管・気管支形成手術の現況」であったが、近年のこの方面の術式の画期的な進歩と適応の拡大が、わかり易いスライドとひきこまれてゆく様な名調子で披歴され、つめかけた200有余人の聴衆を魅了した。

一般演題は20題で例年と変りはなく、肺、縦隔に発生した稀な腫瘍の治験例や特異な進展様式を示した肺がん例がつぎつぎと紹介された。がん専門病院以外での肺がん例が急増していることも近年の傾向であり、これは診断技術というより、東海地方は、関東、関西地方よりかなり遅れて肺がんの増加が始まったことを実証している。

治療法としては新しい多剤併用療法の効果が紹介され、非手術長期生存例の報告もあった。臨床診断法に関する2~3の報告があったが、各種診断法の組み合せによる補助診断法の有用性についての試みが注目されたが、さらに検討されるべきと考えている。

今回は病因論的、疫学的報告がなかったのでその面での hot discussionに乏しかったが、地方会は素直な意見が交換できるよい機会であり、今後に期待したい。

(青木国雄)

九州支部

第21回

日本肺癌学会九州支部会

昭和58年6月18日(土)

長崎県総合福祉センター

当番幹事 原 耕平

(長崎大学内科)

特別講演

肺癌の内視鏡的診断と治療

長崎市立市民病院内科診療部長

中野正心

肺癌患者の内視鏡的診断と治療について報告する。診断面では、内視鏡的所見、直視下生検成績、透視下生検成績、治療面では、OK432の局所注入療法、YAGレーザー治療等について報告し、さらに血痰患者における気管支鏡の有用性についても言及する。

対象とした原発性肺癌は265例、男性196例女性69例であり、組織型は、扁平上皮癌32.4%、腺癌48.6%、小細胞癌、大細胞癌ともに8.6%、その他1.5%であった。病期は、I期22.9%、II期16.5%、III期27.9%、IV期32.9%であった。

内視鏡所見は、肺癌取扱い規約による分類を111例について行った。組織型別では、扁平上皮癌で、壊死ありの腫瘍は61%、小細胞癌では38%に腫瘍が見られたが、これらは、すべて中間細胞型であった。

直視下生検陽性率は、109例中100例91.7%であった。透視下生検陽性率は、68.8%で擦過細胞診、吸引肺生検を加えると89.2%と診断率の向上が見られた。

OK432の局注療法成績では、内視鏡による効果は、腫瘍の消